
KAMEN RIDER GANBARIDE-CLIMAX HEROES-

ログ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KAMEN RIDER GANBARIDE - CLIMAX
HEROES -

【Nコード】

N8544X

【作者名】

ロゲ

【あらすじ】

謎のガンバライドカードを手にした少年、門司仁。

そのカードに描かれているのは、知らないライダーだった。

カードに導かれるかのように、ガンバライドに吸い込まれ、目にしたものは壮絶なライダーバトルだった・・・。

ベルトキタ・・・！（前書き）

これは新たなる仮面ライダーの戦いである。

> i 3 7 3 1 9 — 4 6 6 0 <

ベルトキタ……！

俺は、ゲームセンターをぶらついていく。
目の前にはガンバライドがある。
前から、興味あったんだ。
でも恥ずかしくてできなかったんだ。

一回ぐらいなら、恥ずかしくもないよね。

チャリン。

百円玉を入れる。

すると、カードが出てきた。

これが、ガンバライドカードか。

ピンク色の淵のディケイドが使用するものに少し似ているカード。
そこに描かれているのは、知らないライダーだった。

「仮面ライダーガンバライド」??

そんなライダー知らないなあ……。

俺は、そのカードしか持っていないため、それをスキャンした。
すると……。

俺の体がガンバライドの筐体に吸い込まれていった。

嘘だろおおおおおお？

あれ……ここは……？

俺は、夜の廃墟に倒れていた。

すると、誰かがやってきた。

「????????」「お前、ただの人間だなああ?」

「????」「ウガアアアアアアアアアア!!」

目の前には、地獄兄弟と、紫目のオーズがいた。

キックホッパー（以下キックH）「ぶっ倒されてもいいのかあ・・?
」

パンチホッパー（以下パンチH）「汚してやる!!」

オーズ「ウアアアアアアアア!」

キックH「まあ、騒ぐな。」

パンチH「お前みたいなただの人間は、ここでは生きていけないんだよ!!」

オーズ「ウオオオオオオオオオ!」

あー、大体分かった。

ネガの世界みたいな感じなんだね。

キックH「お前に地獄を見せてやる。」

オーズ「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!」

オーズがこっちに向かって殴りかかってきた。

ああ・・・、俺もうだめだ。

もうどうでもいいや。

さよなら　　え?

俺の目の前に、二人のライダーが立ちはだかる。

「?????」「大丈夫か?」

「?????」「とにかく、出会ったからには、お前もダチだ!地獄兄弟もな!」

そこには、ディケイドとフォーゼがいた。

ディケイド「俺は、仮面ライダーディケイド。覚えとけ!」

フォーゼ「俺は、仮面ライダーフォーゼ！！ガンバライド、キタ
！」

なんだ？ここは？

ライダーが目の前にいる？

夢のようだ！

フォーゼ「おい、アンタ。名前は？」

俺　？俺は、かどつかじん門司仁。

フォーゼ「仁か！気に入った！これやるぜ！」

フォーゼは、俺にフォーゼドライバーのような、アクセルドライバーのようなものを渡した。

赤い起動用のスイッチがない。

その代わり、ベルトの真ん中に、メモリスロットがある。

俺は、さっき手に入れたカードを相手に見せた。

仁「見る！俺も仮面ライダーだ！」

ベルトを腰に巻きつけた。

すると、カードはガイアメモリへと変わった。

「G」と書かれたガイアメモリだ。

仁「変身！」

「ガンバライド」

俺は、メモリを鳴らし、スロットに差し込む。

「3・・・2・・・1！」

そして、グリップを前に動かす。

「ガンバライド！！　ガ・ン・バ！ガンバ！！」

再び、メモリ名を挙げ、いつかのガンバライドのCMの音声が流れる。

俺は、仮面ライダーガンバライドになった。

ガンバライド「俺は、ガンバライドとして戦う！！終わりがくるま

で!!」

ディケイド「俺は通りすがりの仮面ライダーだ! 覚えとけ!」

フォーゼ「宇宙キタ !」

ガンバライド「勝負だ!」

オーズ「ウガアアアアア!」

オーズは俺に襲い掛かってきた。

ガンバライド「はあっ!!」

パンチH「そらあ!」

フォーゼ「これならどうだ!」

「ロケット・オン」

フォーゼ「ロケットパンチ!!」

パンチH「ぐわあああああああ!」

パンチHは一発でノックアウトされた。

キックH「ライダー・キック!!」

「ファイナルアタックライド ディディディディケイド」

ディケイド「はぁーーーーー!!」

キックH「がぁぁぁぁぁあ!」

ガンバライド「どうすりゃいいんだあ・・・?」

オーズ「ぐわあああああ!」

オーズはトラクローで、攻撃してくる。

ガンバライド「そりゃあ!」

そうだ 。スイッチがある!

俺は、一番右のスイッチを押してみた。

「マシンガン・オン」

俺の手に、マシンガンが取り付いた。

ズバババババババババババツ！

オーズ「ガアアアツ！！！」

ガンバライド「今回はこれで負けてしまいな！」

「マシンガン・ゲキレツアタック」

グリップを再び前に動かしてみた。

ガンバライド「必殺技だああああああああ！」

マシンガンから、無数のビーム弾がオーズを襲った。

オーズ「ぐわああああああああ！」

オーズと地獄兄弟は、カードになってひらひらと中を舞っていた。
ガンバライド「俺達は、何をすればいいんだ？」

泥棒

ディケイド「この世界は、ガンバライドの世界だ。」

ガンバライド「ガンバライドの世界？」

ディケイド「そう、ここはガンバライドの世界だ。平行世界論は知ってるか？それぞれ独立して世界があるっていう。その世界の中の一つ、それがガンバライドの世界だ。お前の世界にあるようなガンバライドの筐体につながっているんだ。ミラーワールドのように。」

ガンバライド「で、この世界では何をするんだ？」

フォーゼ「この世界のライダー全員とダチになる！」

ディケイド「ちがう！俺達は、ここでバトルロワイヤルさせられている！勝ち残らなければならないんだ！」

ガンバライド「へえ、なるほど・・・。」

不意に爆発が起きた。

そこには、青が主体のライダーが一人いた。

あれは・・・

ディケイド「ディエンドだと・・・？」

ディエンド「さてと、お宝はどこかな？」

ガンバライド「ディエンドか！お前にやる宝はねえ！」

「マシンガン・オン」

ズババババババババババ！

俺は、マシンガンを乱射した。

ディエンド「なかなかやるね！でもこれには勝てないだろう！」

「カメンライド NEW電王」

NEW電王「ディ、カウントダウンだ。6秒でいい。」

ディ「OK。・・・6。」

まずNEW電王が切りかかってきた。
俺はそれを避ける。

5。

その隙を突いて、俺を突く。

4。

ディエンドはジャンプした。

「アタックライド ブラスト」

そして、弾を乱射する。

そして俺達に当たる。

3。

「フルチャージ」

NEW電王「行くぞおお！」

NEW電王は走ってきた。

2。

「ファイナルアタックライド ディディディディエンド」

ディエンドは俺達にターゲットを向けてきた。

1。

NEW電王は俺を斬った後、ディメンションシュートの渦に巻き込まれ、俺達はその攻撃を受ける。

0。

ディエンド「タイムアップ！」

ガンバライド「ぐ……ぐはあああ……。」

ディエンド「まだ実体を持つてるなんて、しぶといね。まさか、特殊な存在かもね。でも、このカードのライダー達はもうつよ。」
ディエンドは、カードを五枚、広げて見せる。

そこには、このようにカードが並んでいた。

仮面ライダーパンチホッパー

仮面ライダーキックホッパー

仮面ライダーオーズ

仮面ライダーディケイド

仮面ライダーフォーゼ

ディケイドとフォーゼがカード化してしまっていたのだ。

ディエンド「じゃあ、また会おう。」

「アタックライド インビジブル」

ガンバライド「ちくしょあ・・・ちくしょおおお!!!!」

俺は、仲間がいなくなったことで悲しみにあふれていた。

俺は顔をあげる。

すると、目の前には世界の端が繋がっていた。

そして、俺は歩き出した。

そこなら、強くなれるかもしれない。

俺は、そこに向かって飛び込んだ。

無のエリア/ディケイドのカセ

そこは、真っ暗な闇だった。

仁「で・・ディケイドの話だと、ここはバトルロワイヤルで、一人になるまで戦い続けr・・・って俺はなんて世界に来てしまったんだよおおおおおお！」

一人、嘆く俺。

??「少年よ、慌てるな。」

仁「????誰??」

そこには、桜井侑斗のような服装をした、一人の男性が立っていた。あれは、鳴滝さん？

鳴滝「よく分かったな。君の仮面ライダー好きは良く知ってるよ。」

自称・預言者の鳴滝さんがなぜここに？

鳴滝「自称ではないが・・・、バトルロワイヤルなんてディケイドの嘘だ。」

仁「なんでわかるんですか？」

鳴滝「この世界は、無数のエリアに分かれている!!」

仁「エリア？」

鳴滝「君の知っているライダーの世界を再現したようなエリアもある。古き伝統を受け継いで暮らす民族が持つエリアもある。また、恐竜が未だにいるエリアがあれば、一日中戦争しているエリアもある。そう、ここは無数のエリアで成り立っているのだよ。」

仁「で、ここはどんなエリア？」

鳴滝「無のエリアさ。」

無のエリア・・・？

一瞬、鳴滝の言葉に、耳を疑った。

仁「無・・・ですか？何もないって事ですか？」

鳴滝「そうさ、他のエリアは、コズミックエナジーがあるが、ここにはない。それだけのことだ。」

仁「なるh・・・でも、何でもこうやって俺達は存在しているのだからか・・・。」

鳴滝「言いたいことは分かってる。でも、話がそれってしまったね。じゃ、この世界について、話してやろう。」

この世界は、ガンバライドの世界だ。

2008年末に、ディケイドが本格的に活動する少し前に誕生した。そして、ディケイドは世界を巡るたびに出ていたが、なぜかもう一人ディケイドが存在した。

それが、この世界でさっき君が出会ったディケイドだよ。

君の知ってる、テレビで見るディケイドとは全く違うディケイドだ。そのディケイドは、あるときは廃墟でディエンドと戦い、風都でWたちと戦い、そして平地でたくさんライダー達と共闘していた。そのディケイドは、多彩な技を習得していった。

10数もの過激な技を繰り出して、ライダーたちと戦っていた。

そのディケイドが倒したライダーは、死ぬことがなかった。

ディケイドは手加減していたようだ。

そして、他のライダーに影響がなく、ある意味平和だった。

しかし、元々はビル街しかないエリアが廃墟に風都に地下用水路に山寺など、いろいろなエリアが増えていった。

それが最近、急速に増え、100以上のエリアが誕生したんだ。

鳴滝「それが・・・このガンバライドの世界だ。君は、この世界から出られなくなってしまった。」

仁「そんな勝手な！！出る方法はないのかよ！！」

鳴滝「それが・・・ないことはない・・・ただ・・・入手が困難なゾーンメモリを伝説の祭壇に差し込めば、脱出できるそうだがな・

•
○
L

仁「じゃあ、そのゾーンメモリを取ってくるぜ！待ってるよ！鳴滝

鳴滝「ちよつ・・・。」

俺は、再び現れた壁に向かって歩き出した。

仁「变身！」

「ガンバライド」

俺は、メモリを鳴らし、スロットに差し込む。

$$\begin{matrix} \lceil & & & & & & \\ & 3 & & & & & \\ & \cdot & & & & & \\ & \cdot & & & & & \\ & \cdot & & & & & \\ & 2 & & & & & \\ & \cdot & & & & & \\ & \cdot & & & & & \\ & 1 & & & & & \\ & ! & & & & & \\ \lfloor & & & & & & \end{matrix}$$

そして、グリップを前に動かす。

「ガンバライド!! ガン・バ! ガンバ!!」

再び、メモリ名を挙げ、いつかのガンバライドのCMの音声が流れる。

俺は、仮面ライダーガンバライドになった。

ガンバライド「行くぜ、行くぜ、行くぜええええええええ！」

ニンジャエリア/シノビ・超変身！

ガンバライド「ここは、なにかな？」

俺は、まるで太秦映画村に来たような気分だった。

だって、ここは江戸時代のような町に立っているんだから！！！！

ガンバライド「なんだ？ここ、京都か？それともサムライワールドか？」

???「惜しいな！ここは、ニンジャエリアだ！」

ニンジャエリア・・・って事は、忍者がいっぱいいるのか、忍者が支配しているのか、どっちかな！！

ガンバライド「お前は誰だ??」

???「俺は、仮面ライダーシノビだ！！」

ガンバライド「よお！シノビ！」

シノビ「よろしく！」

シノビは、この世界を、悪の忍者軍団「くノ一」から世界を守っているそうだ。

くノ一は女性だけで組織されてるそうだ。

ガンバライド「女性相手になぜ負ける？」

シノビ「バカか？そういうのは差別だぞ？でもさ、強いぜ？トリッキーにさ。」

ガンバライド「そうか・・・じゃ、差別はやめとく・・・あれの事か？くノ一って。」

シノビ「そうだ！こいつらがくノ一だ！」

くノ一の戦闘員達20人が、俺達を襲ってきた。

戦闘員「アアアアア！」

「マシンガン・オン」

俺は、マシンガンスイッチを起動させた。

すると、弾が連射される。

戦闘員「グワアアア！」

そして、マシンガンスイッチをオフにした後、それを抜き、サーベルスイッチを入れ、起動させた。

サーベルスイッチはマシンガンと同じ 部分に差し込むスイッチなのだ。

「サーベル・オン」

ズバッ！

シュパッ！

戦闘員「アアアアーン！」

戦闘員「キヤアアアアア！」

「サーベル・ゲキレツアタック」

ガンバライド「ツルギ・ゲキレツスラッシュュ！！！」

俺は、必殺技を繰り出す。

ズヴァアアアアアアッ！

戦闘員「アアアアアアアッ！」

今回のくノ一、ある意味危険だ。

年齢制限の危険がある。

早いうちに倒してしまおう。

シノビ「早いうちに倒すか……、さっきの戦い……なかなか良かったよ！お前となら、やれる！行こうぜ！」

俺達は9-1CASTLEに来ていた。

このネーミングは間違ってないよな。

そして、その前にある池に俺達はもぐっている。

シノビ「静かに行くぞ……。」

ガンバライド「ああ……。」

俺達は、この池のそこにある、排水溝口に入り、そのまま進入。そして、隙を突いてボスを匂殺。あまりにもシンプルで、不安なサクセンでもある。頑張らなきゃ。

俺達は排水溝口にもぐりこんで、何とか中に潜入した。

シノビと俺は、シノビの力で姿を消し、そろそろと歩いていた。

そして、1分、2分、3分と、時が流れていった・・・。

シノビ「あれ・・・さっき、この道通ったよな？」

ガンバライド「あ・・・そういえば・・・。」

シノビ「もしか・・・。」

ガンバライド「・・・？」

シノビ「ちよつと待ってる。」

ガンバライド「お・・・おい！」

なにやら、シノビは奇妙な術を唱えた。

シノビ「はあああああつ！シノビ流忍法”壁破り”！！！」

忍法”壁破り”の力で、何とか、エンドレスからは逃れられた。しかし・・・くノ一はどこへ・・・？

シノビ「ここだよ。」

ガンバライド「そうか・・・。」

シノビ「行くぞ！」

俺達は、ふすまを開けた。

すると、そこにくノ一がいた。

シノビ「成敗！」

くノ一「ぎゃあああああああああああ！」

くノ一は、一撃で殺された・・・。

しかし……。

ズゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！

すると城の前に、大きな巨人が現れた。

ガンバライド「うわああああああ……どうすんだよ！あれ！」

シノビ「俺の役目はもう終わった。」

突然、シノビが訳のわからないことを言った。

ガンバライド「冗談はやめろって……。」

シノビ「俺の力をお前に託す。それが俺が鳴滝に言われた最後の使命だ。」

ガンバライド「……そっか。」

鳴滝さんの言うことならしょうがない。

今、信用できるのは鳴滝さんと、それに協力するものたちだけだから。

シノビ「最終忍法”忍押箱”>>シノビスイッチくく」

シノビが忍法を唱えると、アストロスイッチに変わった。

銀に輝く、部分のスイッチだ。

俺は、サーベルスイッチを抜き、シノビスイッチを入れ、起動させた。

「シノビ・オン」

すると、和風の音楽が流れ、俺の体を銀の光が包んだ。

ガンバライド「うおおおおお！！！」

気がつく俺は、銀と黒が主体の姿になっていた。

ガンバライド！これが、お前の初強化だな！

ふいに、シノビの声が聞えた。

これが、お前の強化形態の一つ「シノビステイツ」だ！

ガンバライド「ありがとよ！」

この装備は、腕にプレスがしてあるぐらいだ。
まずは・・・「壺」のスイッチを押そう。

「イリユージョン・オン」

俺は、3つに分身した。

ガンバライド「すぐに終わらせてやる！」

俺は、城をぬけ、巨人に向かってとび蹴りを放った。

巨人はよろめく。

次は、「弐」のスイッチだ。

「インビジブル・オン」

俺の分身能力がなくなり、そのかわり自分の姿を消した。
後ろに回り込み、連続蹴りを放つ。

巨人はそのすさまじい蹴りで唸る。

さらに、「参」のスイッチを押す。

すると、今までの効果が消え、手には手裏剣がある状態になった。

俺は、それを投げる。

巨人はまた激しく唸る。

ガンバライド「よし！とどめだ！」

「シノビ・ゲキレッツアタック」

俺の後ろから、無数の手裏剣が飛び出し、巨人を貫く。

そして、俺は分身し、さらに姿を消し、飛んで連続蹴りを放った。

巨人は、跡形もなく消えた。

仁「ふう・・・さっぱりしたあ・・・。」

そう思っているとまた、目の前に灰色の壁が現れた。

仁「次は、どんな世界かなあ??？」

俺は、ワクワクしながら飛び込んだ。

すると、俺はなぜか、どこかの学校にいて、さらに学生服を着ていた。

仁「なんで、学生服？」

俺は、訳がわからなくなっていた。

周りを見渡すと、空を見上げている一人の青年がいた。気を落ち着かせるため、俺も空を見ることにした。

その空は、とても青くきれいな、青空だった。

ニンジャエリア／シノビ・超変身！（後書き）

シノビ「これで良かったんだよな。あいつなら救えるはずだよな・・
」

シノビは仁のポケットでつぶやいた。
誰にも聞こえないように、そっと。

空我的世界／俺、転校！

？「青空が、笑ってる気がするよ……。やっぱり空ヶ丘は最高だ！」

空ヶ丘……？どこだ、それは。

仁「ねえ……君、名前何ていうの？あと、ここはどこ？」

？「僕は空野輝！あと、ここは空ヶ丘にある都立空ヶ丘第二高校だよ！」

鳴滝「ガンバライドがリーダーから消えてしまった……。ベルトが破壊されてしまったのか？それとも、まさか……。」「
鳴滝は、だんだん不安になってきた。

白色のアストロスイッチカバンを持って。

輝「その制服……まさか転校生？」

仁「そう……みたいだな！俺は、門司仁！よろしく！」

俺は、別のエリアに来たときに何か起きたのだろうと思い、このエリアに流されることにした。

輝「でさ、その名札なら、僕と同じ１年だね！」

仁「へえ……。」「

キンコンカーンコン

俺は、先生の指示で所属先のクラスの前まできた。
ここか……。」「

先生「門司君、入ってきてください！」

仁「あ、はい！」

俺は、教室に入った。

すると、拍手喝采で迎えられた。

なんか嬉しかった。

そのクラスメート達の中にひとり、輝がいた。

とても嬉しそうだった。

仁「はじめまして、門司仁といいます。特技は短距離走です、この学校のことは、まだまだ良く分らないですが、頑張って慣れたいと思います。以後、よろしく願います。」

俺は、適当に挨拶しておいた。

先生「じゃあ、門司君は、さんの茜さんのとなりね。」

俺の隣の席の子は茜ソラというらしい。

ソラ「門司君、よろしく。」

なんか可愛い子だな。

そして、4時間ほど時間は過ぎた。

弁当の時間が過ぎ、5時間目に入ろうとしたその時、先生の代わりにはいつてきたのは・・・。

ライオンの姿をした怪人だった。

みんなは、思いつき笑い出したが、俺にはわかる。

仁「よお！怪人野郎！早速倒させてもらうぜ！」

俺は、椅子から立ち上がった。

そのときには、怪人はもう、一番前の席の人の首を絞めていた。

「ガンバライド」

俺は、メモリを鳴らし、スロットに差し込む。

「3・・・2・・・1！」

仁「変身！」

そして、グリップを前に動かす。

「ガンバライド！！ ガ・ン・バ！ガンバ！！」
再び、メモリ名を挙げ、いつかのガンバライドのCMの音声が流れる。

俺は、仮面ライダーガンバライドになった。

ガンバライド「お前さんよお！怪人退治なら俺にまかせな！」

「テープ・オン」

俺は、部分のスイッチを押した。

すると、大きなテープカッターのようなものが足に取り付いた。
ガンバライド「行くぜっ！」

すると、黄色いテープが怪人のほうへと向かっていく、
そのテープはモジュールから出ているのだ。

そして、怪人に巻きつくと、自然にテープは切れ、モジュールの中に収納された。

俺は、そのスイッチの電源を切り、怪人のほうへ走っていった。

そして、その怪人を持ち上げ、窓から外に投げた。

俺は、急いでグリップを動かした。

「ガンバライド・ゲキレッツアタック」

俺は、窓からジャンプした。

すると、ガンバライドのスロットのようなものが、いくつも現れ、
それを突き抜けていく。

そして、気づいた頃には相手にとてつもなく強いキックが決まった。

怪人は大爆発を起こした。

輝「君も仮面ライダーだったんだね！！」

宏「すごいなああああああ！」

みんなから拍手の嵐が巻き起こる。

それもつかの間、学校中に悲鳴が響き渡った。

それは、外で体育をしている生徒たちも同じだった。
ガンバライド「今行くぜ！」

俺は×部分のスイッチを押す。

「スケボー・オン」

さらに、部分のスイッチを押す。

「バスター・オン」

俺は、スケボーに乗り、大きなバズーカーのようなバスターで攻撃する。

生徒を襲っている怪人たちは一撃で爆発する。

ガンバライド「大丈夫か？」

生徒「は・・・はい・・・。」

俺は、二つのスイッチを切り、部分のスイッチを押す。

「シノビ・オン」

俺は、シノビステイツになった。

「イリユージョン・オン」

俺は、壱のボタンを押してモジュールを起動させる。

3人に分身した俺は、それぞれの場所で戦うように動いた。

その頃、教室では。

ソラ「きゃあああああああああ！」

輝「変身！」

輝は空我に変身する。

そう、空我こそがこの世界の一人目のライダーなのだ。

宏「ちつくしよおおお・・・。」

そして、樹木に変身できるはずの宏はベルトの役割をするミオがないため、変身が不可能なのだ。

??「待たせたな！宏！」

宏「ミオオオオ！」

ミオ「行くぞ！」

ミオはジュモクギアになり宏の腰に巻きついた。

そして左手を上へ上げ、右手でバツクルのレバーをつかむ。

宏「変身！」

そう叫び、レバーを右から左に動かす。

すると、宏は仮面ライダー樹木へと変身した。

空我「はあ！そりゃあ！てやあ！」

樹木「そりゃあ！はいいい！せいやあああああ！」

空我や樹木は怪人と戦っていた。

すると……。

どこからか、二人とも、銃で狙撃された。

ディエンド「さてと、お宝はどこかな……？」

悪魔のスイッチ/返せ！そのカード！

ディエンド「空我に樹木……。そしてこの学校にはガンバライドもいる……。僕のカードを探してるはずさ。」

「カメンライド バース」

「カメンライド サイガ」

「カメンライド ライオトルーパーズ」

ディエンド「さてと、お宝はどこかな？」

クウガ「あれは……。ディエンド？」

樹木「でも、あのライダー達、こっちに向かって攻撃してくる。」

僕達はその攻撃に見事ぶち当たった。

バース「さあて……。お仕事開始」

「サーチャー・オン」

ガンバライド「これで、ライダーをサーチするぜえっ！」

俺は、リーダーのようなアイテムを、部分に取り付けて、ライダーと怪人を探していた。

すると、ピンポイントで、体育館に当たった。

ガンバライド「さてと、行かなくちゃな。」

クウガ「どうしようか……。ん？」

さっき、体育の授業で走り高跳びをやったみたいだ。

その棒を僕は、手にとり、力をこめて。

クウガ「ドラゴンフォオオオム！」

僕はドラゴンフォームになった！

ドラゴンロッドの一撃が、ライオトルーパーを弾き飛ばしていく。樹木は”雨”と書かれたゼンマイをバツクルに差し込む。

「レイニーフォーム！」

樹木は緑色から水色のボディへと変化を遂げる。

これがレイニーフォームなのだ！

そして、レインシャワーガンでサイガを空中から地面に打ち落とす。

「ウィップ・オン」

俺は、部分にはじめて使うスイッチを入れ、起動させた。

すると、ムチのようなものが現れた。

ガンバライド「体育館、キタああああ！！！」

俺は、近くにいるやつをムチで攻め……こいつは、ディエンド
！！

ディエンド「ガンバライドか……！」

ガンバライド「ディエンド！ディケイドとフォーゼのカードを返せ

！」

ディエンド「ま、追われるのも嫌だし、これだけ渡すよ。」

ディエンドは望みどおりの二枚のカードを渡した。

ガンバライド「気が利くやつじゃねえか……ありがと……って、
うわあああああ！」

突然、二枚のカードが光出し、世界の壁が出現した。

カードはその壁に向かって放たれていった。

もちろん、俺の意識ではない。

ディエンド「んーじゃ、楽しんでくれ」

「アタックライド インビジブル」

そして、ディエンドは消えた。

クウガ「ドラゴオオオオン！ブレエエエエイク！」

クウガは龍を描くようにドラゴンロッドを振り回し、ライオトルーパーを一掃した。

「レイニーパワーチャージ！」

樹木「スプラッシュストラアアアイク！」

樹木はパワーを銃にこめ、巨大なエネルギー砲を発射した。サイガは、跡形もなく消え去った。

ガンバライド「一気に決める！」

「バスター・ゲキレッツアタック」

ガンバライド「ライドチャアアアジ！」

俺は、部分のバスターを使い、パワーチャージをはじめた。

「ブレストキャノン セルバースト」

バス「派手に行くか！」

バスも準備をはじめた。

ガンバライド「ラアアアアアイジング！ストラアアイク！」

そして、どこかで聞き覚えのあるようなセリフを発した。

「バス「ファアアアアイナル！ウエエエエエブ！」

バスもどこかで聞き覚えのあるようなセリフを発する。

二つの光弾がぶつかり合い、爆発を起こす。

最後に勝ったのは……ガンバライドだった。

ガンバライド「調子乗るからだ……。」

ガンバライド「それで、水色のは、宏君とミオさんで樹木・・角が折れてるクウガは・・輝君だったんだ。」

輝「そうだよ！」

宏「よろしく！」

ミオ「俺は、ベルトになるんだ！」

ガンバライド「よろしく！」

その後、いろいろあつて一日は終わった。

仁「輝君・・。」

輝「どうしたの？」

仁「実は俺……この世界の人間じゃないんだ。」

輝「ええええええええええええええええ！」

仁「だからさ、あの時変な質問をしたんだ。」

〈回想〉

仁「ねえ・・・君、名前何ていうの？あと、ここはどこ？」

輝「僕は空野輝！あと、ここは空ヶ丘にある都立空ヶ丘第二高校だよ！」

輝「それで・・・。」

仁「だから、俺を泊めてくれる宿とかないかな？」

輝「だったら家にくればいいよ！」

僕は別にいいと思う。

マイペンライは宿としても利用されているんだし。

あ、マイペンライって僕の家のことだよ！

僕の家、喫茶店やってるんだ。

そして、マイペンライ。

輝「おやつさん！今日の夕飯は？」

おやつさん「納豆カレーだよ！」

おやつさんはこの店長である。

そして、僕達は納豆カレーができるまで待っている間、クラヒフォ
ーゼ（Wii版）で遊ぶことにした。

仁「ディケイド・ノーマル&フォーゼ・ベースステイツ」VS輝「
クウガ・マイティ&オーズ・タジャドル」

結果・輝の勝ち！

仁「オーズ・紫目」VS輝「クウガ・アルティメット&ディケイド・
ノーマル」

結果・輝の勝ち！

仁「オーズ・タジャドル&オーディン」VS輝「クウガ・マイティ
”ゴウラム”」
結果・仁の勝ち！

そして、納豆カレーができた。

納豆カレーを食べながら、僕と仁君は話をしていた。

今日は、僕と仁君、そしておやつさんしかここにはいない。

みんな用事で別の場所にいるんだ。

輝「それで、仁君の世界っていうのは・・・？」

仁「俺は、元々こんな感じの世界に俺は住んでいた。怪人もライダーも実物はいなかったが、ライダーはテレビの中で怪人を倒していたよ・・・」

輝「そうなんだ・・・僕の世界も同じように仮面ライダーはテレビの中だけの存在だったんだけど、急に怪人が現れて、僕はクウガになったんだ。」

仁「俺は、ガンバライドをしようとしたら、仮面ライダーガンバライドってカードが出てきたんだよ。そしたら、俺は筐体に引きずり込まれて、気づいたら地獄兄弟とオーズに睨まれて、ピンチになった際にディケイドとフォーゼからベルトをもらったんだ。」
輝「いろいろあるんだねえ。」

仁「ま、そういうわけだ。」

そのころ、どこかくらい道で。

ケータイを覗きながら悲しげに歩く男性がいた。
ケータイの画面にはこう書いてある。

〳〵空ヶ丘第二高校裏サイト〳〵

p n・ハマ

鈴木ってうざくね？

p n・ラビタン

まち鈴木氏ね

p n・がっぱれ大佐

マジアイツ学校くん！空気が汚れる。

これを見ているのは、この画面に悪口を書かれている鈴木である。

鈴木「何で嫌われるんだろぅな……。」

?????「そこのお前……。」

鈴木「何??怪人?」

そこには、サソリを思わせる人形の怪人がいた。

?????「我は、スコープオン・ゾディアーツ。この悪口を書いたやつが憎くないか……?」

鈴木「憎いよ……。」

スコープオン「なら、このスイッチで無限の力を手にするか……? 復讐ができるぞ……?」

鈴木「欲しい……。そのスイッチ欲しい……。」

スコープオン「これは無料でやる。だから、思う存分使え……。星に……。願いを……。」

鈴木はボタンを押す。

すると、熊の姿をしたゾディアーツが現れた。

名を、ベア・ゾディアーツという。

スコピオン「もう・・・この世界に用はない・・・。」
スコピオンは別の世界に消えていった。

鳴滝「まさか・・・ガンバライドの世界というのは偽りか・・・？
そういえば、渡がガンバライドの宇宙の中に世界があると言っていたな・・・まさかその説のほうが正しいのではないのか・・・。」
鳴滝は、未だにガンバライドを探し続けている。
白いアストロスイッチカバンを持って。

次の日。

生徒が校門から逃げ出す。

仁「なんだ？」

生徒「鈴木が・・・鈴木があああああ！」

輝「鈴木君つてまさか・・・！」

生徒「そうだよ！お前のクラスの鈴木だよ！」

仁「鈴木君・・・、あああの子か！つて、ゾディアーツかよ！大熊座の！」

そして、ベアは近くにいる生徒・・・つてあれ茜さんだよな！

ソラちゃん！

僕が助けるから！

だから見てて！

僕の、

「変身！」

クウガステイツ／呼応する魂

クウガ「はぁ！とりやぁ！」

僕はゾディアーツにパンチしていく。

しかし、ゾディアーツに軽々と投げられてしまう。

クウガ「負ける・・・もんかぁぁぁぁぁ！」

俺たちは、ダスターたちと戦っていた。

仁「せえい！はぁ！せいやぁぁぁぁぁ！」

宏「フツ！へっ！せい！」

次々とダスターを倒す。

しかし、ホントに戦闘員は弱いなぁ。

クウガ「超変身！」

僕はドラゴンフォームに変身した。

そして、近くにあった木の棒をドラゴンロッドにして立ち向かった。

クウガ「はぁ！せい！」

しかし、攻撃はゾディアーツには効かなかった。

仁「変身！」

「ガンバライド ガン・バ・ガンバ！」

ガンバライド「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺はジャンプし、ゾディアーツにキックを決めようとするが、弾かれる。

ミオ「待たせたね！」

宏「ミオ！行くぜ！変身！」

宏はミオとともに仮面ライダー樹木に変身した。

樹木「さぁ！行くぜ！」

「リーフブレード！」

俺はリーフブレードで攻撃する。

しかし、その攻撃も弾かれる。

ガンバライド「大丈夫か・・・？」

クウガ「そつちこそ。」

樹木「なんか手はないのか？」

ガンバライド「何かあるはずだ！」

俺は、そう言う。

すると、クウガのベルトにあるアマダムが光り出す。

クウガ「なななな何が起こってるんだ？」

それに呼応するかのように、俺のベルトも樹木のベルトも光り出す。

そして、クウガのベルトから光球が現れ、俺のベルトから、真っ黒

なスイッチが現れ、樹木のベルトからゼンマイが現れる。

そして、それらが一つになり、一つのスイッチとなった。

番号の書いてある部分に、クウガの紋章がついた。

ゼンマイを回してスイッチを起動するそうだ。

ガンバライド「さあ！行くぜ！」

「クウガ・オン」

そんな音声になった後、クウガの変身音声が鳴り響き、俺の体はマ

イティフォームのような装甲で覆われ、顔にはクウガの角がついた。

よお！仁！これが、クウガステイツか！かっこいいな！

この声は・・・シノビか？

そうだよ！これならお前も戦える！

分かった！がんばってやるぜ！

突然、俺たちの体が黄金に輝いた。

クウガも、樹木も、俺も！

ガンバライド「行くぜ！」

俺は、ゾディアーツをアッパー攻撃する。

そして、飛び上がったゾディアーツにクウガと樹木がダブルキックを放つ。

「クウガ・ゲキレツアタック」

そして、みんなに遅れて、俺はライダーキックを決める。

ガンバライド「はあああああああああああああああああ！」

ゾディアーツの体は、大爆発を起こした。

そして、落下してきた鈴木をキャッチする。

ガンバライド「鈴木・・・？」

鈴木「。」

鈴木は気を失ったようだ。

クウガ「やったね！」

樹木「やったな！」

ガンバライド「ああ。」

その日の授業が終わると校門の前で世界の壁が現れた。

仁「輝、宏。俺はもう行くな。別の世界が待っている。」

輝「うん、分かった。行っておいで。」

宏「まだどこかで会おうな。」

仁「じゃあな！」

俺は、別の世界へと消えていった。

しかし、戦いは終わったわけではなかった。

あのゾディアーツスイッチにはラストワンが残っていたのだ・・・。

SATAN OF WORLD / すれ違う戦士 (前書き)

今回から、紅夜さんの作品「仮面ライダーサタン」、俺の姉ちゃんは・・・」とコラボします！

まず今回は、「仮面ライダーサタン」から！

SATAN OF WORLD / すれ違う戦士

破壊された街。

死んでいる人々。

一体なぜこのようなことが。

真相は、ヤツラ達が知っている。

「天使」と「悪魔」だけ。

ここは「デーモンリベリオン」の世界。
その物語の平行ルである。

天使の中でも少し偉い「天使・ミカルゲリオ」は、街を部下達に破壊させていた。

ミカルゲリオ「ふははははははははははははははは！見る！人がごみのようだ！」

??????「フツ。」

誰かが細い何かを投げる。

そして、ミカルゲリオの首に刺さる。

ミカルゲリオはそのまま倒れる。

天使達は驚いて飛んできたほうを見る。

すると、そこにはみたこともない戦士がいた。

その戦士の名を「仮面ライダーガンバライド」という。

「バスター・オン」

俺は、部分に大砲のようなものを装備し、飛び上がる。
そして、向かってきた天使達をこっぱみじんに倒してく。
ガンバライド「天使が・・・ごみのようだな！」

ミカルゲリオ「はあああああ！」

天使は灰色の壁を出現させ、ライダーを二人出した。

一人はポセイドン、もう一人はオーガだ。

ガンバライド「じゃあ、こいつら倒そうじゃん！」

サタン「ああ、やるか！」

俺たちは立ち向かっていく。

オーガ「お前ら・・・潰す。」

ポセイドン「俺と、戦え！ただし、命乞いはするな。時間の無駄だ。」

「

俺はポセイドンと戦っている。

「クウガ・オン」

クウガステイツにチェンジし、ポセイドンの剣を奪う。

そして、力をこめてタイタンフォームになる。

ガンバライド「はああああああ！せえい！」

「クウガ・ゲキレッツアタック」

俺は、ポセイドンを必殺技で倒した。

サタン「はあ！」

オーガ「フッ！」

黒いライダーがぶつかり合う。

サタン「！」

俺は、強くキック攻撃をした。

すると、オーガは大爆発を起こした。

ガンバライド「ここにはもう、用はないな。」

サタン「そうか、なら行けよ。別の場所の平和も守れよ。ここは俺

が、守るから。」

ガンバライド「なら、俺の姿がサマになったらまた来てやる。」

サタン「待ってるぜ。」

俺は、別の世界に消えていった。

この世界で得たのは、拾った天使の羽。

無のエリア／途中経過

鳴滝「そこにいたのか……。」

仁「鳴滝さん……。」

鳴滝「どこにいたんだ……？」

仁「空我の世界と、サタンの世界。」

鳴滝「世界?? エリアではないのか？」

鳴滝は俺の話を聞いて驚く。

ここは、無のエリアである。

また飛ばされたようだ。

鳴滝「そして、フォームを二つも手に入れたのか……。」

仁「うん。まあ一応。シノビとクウガ。」

鳴滝「そうか……。途中経過をありがとう。」

仁「それと、ゾーンメモリはなかったな。」

鳴滝「なかったのか……。ならWの世界に行くことにしようか。」
仁「ああ、そこならありそうだな。」

俺は、また別の世界に行った。

そこには道の場所が広がっていた。

幕開け

そこは荒れ狂っていた。

草木など周りには全く見えず、地割れを起こした跡が良く見える。

この黒い地面に立つ俺が見たのは赤い空、火の海、迫りくる怪人軍団。

俺が下した判断は一つ。

仁「変身！」

「ガンバライド！！ ガ・ン・バ・ガンバ！」

俺は、仮面ライダーガンバライドへと姿を変える。

そして、俺は怪人軍団に立ち向かっていった。

あの怪人軍団は「ユニバースショッカー」

財団？を配下に置き、全宇宙を支配しようとしている極悪な組織である。

ガンバライド「俺は

仮面ライダーだから！決して負けない

！」

「マシンガン・オン」

俺はマシンガンモジュールで戦闘員を打ち倒し、隙をついてエルボ
ーを放つ。

まだまだ敵はいる。

「マシンガン・ゲキレツアタック」

俺は、マシンガンの必殺攻撃を浴びせた。

ガンバライド「チッ！どんだけいるんだよ。こいつら！」

俺はもうわかっていたのかもしれない。

この戦いは、終わりになき戦いだ。

これは果て無きHEROES大戦の幕開けである。

人違いと未来と明日のパンツ

「映司君、久しぶりだね！」

今度、クスクシエで年越しパーティーするんだけど、映司君もどう？
もし良かったら、参加してね！

泉比奈」

映司と呼ばれる一人の青年は一通の手紙を眺めていた。
日本の空港で。

年越しパーティーに参加するために帰国してきたのだ。

映司「比奈ちゃん、久しぶりだなあ。元気にしてるかな？」
俺はとてもいい気分だった。

比奈ちゃんたちにまた会えるから。
ずっと会いたかったから帰国してきたんだ。

ここにヤミーがいるみたいだな。
この空港にな。

この俺、アंकは空港の中をうろついていた。

俺（映司）は、不意に懐かしいものを見た。
あれ、アंकじゃないか！

映司「おい、アंक！」

アंक「？」

誰だ？こいつ。

生意気な面しやがって。

アंक「誰だ？お前。」

映司「アंक、俺だよ。”火野映司”だよ。」

アंक「ふざけるな！お前の事なんか知らない。俺はここにヤミーを探しに来ただけだ！俺は完全な体を手に入れるからな！」

映司「そういうのはどうでもいいだろ？あ、そうだ！アイスキャンデー食べるか？」

アイスが好きならアंकだろう。

アイスが嫌いなら人違いかもしれない。

アंक「遠慮なくもらうぞ……。」

アंकがアイスにかぶりつこうとしたその瞬間……。

目の前にライダーのようなヤミーのようなやつがいることに気が付いた。

?????「お前か……仮面ライダーオーズ”火野映司”！！俺と戦え！」

映司「何のために？」

?????「お前は強いようだからな！」

俺は、コアメダルがないため、変身できない。

そして逃げようとする。

?????「おっと、命乞いはするなよ？時間の無駄だ。」

アंक「貴様……オーズだと……？」

映司「なにボケてんだ！ほら！メダルないの？」

アंकなら持つてると思ってた。

アंक「チッ。お前にやるコアはない。だが、俺の使うコアはある、変身。」

「タカ！」

アंकは、メダルスロットの一つ付いたオーズドライバーのようなものを腰に巻き、タカメダルを使ってアंकは変身した。

ホーク「仮面ライダー・ホーク！」

ホーク「はあ！そらあ！せい！」

俺は、ヤミーを殴っていく。

殴っていくごとに、拳に赤いオーラがまとう。

ホーク「こんなやつもどうだ？」

「カマキリ！」

俺は、カマキリメダルを左腰のバックルに入れる。

そして、バックルの下のボタンを押す。

すると、腕の部分が黄緑に変化し、鎌のようなものが腕に取りついた。

ホーク「はあああああああ！」

俺は、カマキリソードでヤミーに攻撃する。

しかし、ヤミーも負けていられない様子だ。

自分の右手に持っている剣で攻撃を跳ね飛ばす。

恐ろしい攻撃だ。

俺は痛みで立ち上がれないのでは？と思うほどの痛みを全身に負っていた。

????「お前は誰だか知らないが、実力はその程度か？」

ホーク「負けてられつかよ・・・。」

俺（映司）は、あのヤミーの中にメダルが隠されていることに気がついた。

そして、ライダーに駆け寄った。

映司「アंक、お前腕伸ばせるだろ？それであのヤミーの体からコアメダルを出して！俺が変身できればかなりの戦力になるはずだから！」

ホーク「しょうがねえなあ。」

アंकは変身を解き、右腕を元から外した。

そして、ヤミーの腹の中にもぐりこんだ。

アंक「そらあ！受け取れ！」

アंकが飛ばしたメダルはシャチ・ゴリラ・チーターだ。

映司「变身！」

俺は、そのメダルを受け取りオーズドライバーに入れる。

そして、オースキャナーでそのメダルをスキャンする。

「シャチ！ゴリラ！チーター！」

俺は、仮面ライダーオーズ・シャゴリーターへと変身を遂げた。

オーズ「はあああああああ！」

俺は、チーターの高速移動を利用し、空港の壁を駆け抜ける。

そして、上空からゴリバゴーンを発射する。

ヤミーは重い攻撃に叩き潰されそうになった。

ヤミーは反撃しようと、剣に力を込め、衝撃波を繰り出す。

そこで、シャチの放水を使って、相手の視界をくらませ、相手の気づかないうちにチーターで相手の後ろに回りこむ。

そして、一発パンチを放つ。

?????「ぐわあああああつ！」

ヤミーは倒れた。

?????「覚えておけ……。」

ヤミーは消えていった。

映司「アंक！大丈夫か？」

アंक「ああああ……。」

映司「とりあえず、クスクシエに行こうか。」

海斗「おまえ……なんだよ！」

仮面ライダーアクアになる者”水渡海斗”の目の前にはあのヤミーが立ちはだかっていた。

?????「俺はポセイドン……。仮面ライダーポセイドン！お前をつぶしに来た！」

海斗「仮面ライダー……。お前みたいなやつが？ライダーは助け合いでしょ？」

ポセイドン「うるさあいつ！お前の指図は受けない！さっさと变身

しろ！」

海斗「チッ。仕方ねえなあ。変身！」

俺は、変身ポーズを取り、アクアバツクルの力で変身した。

青いスーツに見をまとう水のライダー”仮面ライダーアクア”である。

アクア「仮面ライダーアクア！」

ポセイドン「アクアアアアアア！貴様を本気で潰させてもらう！」

アクア「やってみろ！」

ポセイドンとアクアはぶつかり合って……。

比奈「映司君！それ、アंक？」

比奈ちゃんは案の定驚いた。

ここは、クスクシエ。

今は知世子さんはいないようだ。

映司「ああ、そうなんだ。」

比奈「アंक……ここにあるよね？」

比奈ちゃんは割れたタカメダルを見せる。

映司「うん。もしかして、偽者か？」

アंक「んなことあるか！俺はグリードだ！」

「確かにそれはグリードだよ！素晴らしいッ！」

突然、クスクシエのテレビモニターから見たことある人物が映し出される。

鴻上光生だ。

メダルシステムを開発した鴻上ファウンデーションの会長だ。

「そのアंकは、君達の知っているアंकたちとは違う！」

映司「違うんですか……？」

「そのアंकは、火野君がオーストライバーを手になかった世界のアंक君だ。」

映司「ということは、別世界のグリード……。」

前に、電王たちと一緒に時を救ったことがあるからこう言う複雑のことも分かる。

比奈「よく分からないけど・・・、私の知ってるアंकじゃないってこと・・・？」

映司「うん、そうみたい。」

アंक「でもよ、お前もつくづくダサイよな。メダル奪われたりしてよ。」

映司「そっちだってあのヤミーにフルボッコにされてたじゃないか！」

比奈「もう、やめて！」

比奈ちゃんは、俺たちの耳を強く引つ張って口喧嘩を止めた。

アंक「俺の世界のやつと同じぐらいの怪力馬鹿だな。」

比奈「その言い方はないでしょお！」

アंक「どうもこうも知らんが・・・。」

アクア「はあ！せえい！」

ポセイドン「全く効かないな・・・。」

アクア「あいつ・・・俺と同じ力を持ってやがる・・・。」

ポセイドン「お前の水の力に似ているだろうな。はあああああああっ！」

アクア「がああああああああああ！」

俺は弾き飛ばされる。

こんなやつにつ　　！

そして、その戦いの様子はクスクシエまで聞えてきた。

映司「　　！」

アंक「メダルのにおいだな。」

映司「行こう！」

アंक「ああ。」

俺たちは外へと駆け出した。

アクア「お前なんかに負けないいい！」

ポセイドン「あがくのもやめないか？？」

アクア「がああああああ！」

俺の体に刺激が走る・・・。

もう、俺は終わりなのか・・・？

そう思った瞬間、奇跡は起きた。

二人の人の影が見えたのだ。

映司「あれ・・・仮面ライダー。」

アंक「そんなことはどうだっていいが、とにかくあいつのセルメダル全て奪う！」

映司「行くよ！」

アंक「チツ。」

映司「変身！」

アंक「変身。」

「シャチーゴリラーチーター！」

「タカ！」

オーズ「はああああああつ！」

ホーク「ふううううううつ！」

俺たちは変身を遂げた。

ホークは正面突破していく。

そして、ヤミーの腹に腕を突っ込む。

すると、ヤミーのメダルが血のように吹き荒れた。

オーズ「よし！いいメダルが揃ったぞ！」

「タカ！クジャク！コンドル！タージャードル！」

オーズ「はあああつ！」

俺は、ホークに似たような形態「タジャドルコンボ」に進化を遂げた。

そして、タジャスピナーにコアメダルを入れる。

「タカ！クジャク！コンドル！シャチ！ゴリラ！チーター！バッタ！ギガスカン！！」

オーズ「はあああああああつ！」

エネルギーを溜め、赤い光弾を作る。

そして、ポセイドンに向かって放つ。

「**バッタ!**」

その隙を狙い、ホークはバツタの力で上空に跳ね上がりキックをします。

アクア「あんなやつらもいるんだな。よし！俺だって……！」

俺もポセイドンに駆け寄って、キックやパンチをかます。

その攻撃はポセイドンのどんな防御も貫いていく。

あの弱い攻撃は気の迷いだっただかのように。

そして、決めの一発にパンチを放った。

するとポセイドンはぶっ飛ばされた。

アクア「俺に勝てると思うなよ！俺は世界を救ったライダーなんだからな！」

オーズ「アクア、だっけ？君が必殺技、決めていいよ！」

アクア「分かったぜ！」

ホーク「そんな赤の他人にいいのか？」

オーズ「だって、ライダーは助け合いでしょ？」

俺は、力を溜める。

気合が強くなっていくごとに水色の粒子の輝きが増す。

アクア「うおおおおおおおおお！アクアアアア
アアアア！ライダアアアアアキイイイツク！」

すさまじくド派手なモーションがポセイドンを驚かせる。

そして、その攻撃があたり、ポセイDONはメダルを散らし、その場に倒れた。

アクア「まだ粘るか！」

俺は、ポセイドンにもう一度キックを放とうかと思うと。

オーズ「やめて！」

アクア「なぜだ！」

オーズがそれを阻止する。

オーズ「ライダーは助け合いだよ。このライダーにも、優しいこころはきつとあるんだよ。アंकにも、アクアにも！だから、暴走が止まったのなら話そうよ。」

アクア「しょうがないなあ。」

俺は、仕方なく、オーズに従うことにした。

映司「ねえ、君大丈夫？」

???「大丈夫。」

映司「君、名前何ていうの？」

???「僕は湊ミハル。仮面ライダーポセイドンだよ。」

映司「どうして暴れたの？」

ミハル「それは……。」

僕は、40年後の未来からやってきたんだ。

それにはいろんな話がある。

僕の時代にも怪人はいる。

その怪人に立ち向かうために、僕は鴻上という老人から「ポセイドンドライバー」を受け取ったんだ。

そして、ポセイドンに変身し、敵を倒していったんだけど。

ある日、時空の穴から無数のコアメダルとセルメダルが僕の体に入ってしまったんだ。

そのせいで僕の体は暴走し、今にいたるのさ。

アクア「そんな過去があったのか。悪かったな。」

ミハル「こっちこそ。」

アクアとミハル君は握手をした。

その握手はとても気持ちのいいものだった。

映司「じゃ、僕はもうそろそろクスクスエに戻るけど、みんなどう？」

海斗「俺も行く。」

アング「まあ、あそこにはアイスがあるから俺も行く。」

みんなは賛同した。

ミハル君を除いて。

映司「ミハル君は？」

ミハル「僕でも・・・いいの？」

映司「もちろん！」

ミハル「じゃあ、僕も！」

そして、大晦日パーティーが開かれた。

鳴滝「そちらにアクアとホークを送って正解だった。また大きな絆が芽生えた・・・その絆さえあればユニバースシヨッカーなんて・・・」

鳴滝は、影でボツボツとつぶやいていた。

正義の闇

ここは廃墟。

とても薄暗い。

真っ暗な空。

そして、紅い地面を踏みしめる真っ黒な奴。
ゾンビである。

凰牙「お前ら、待ってたぜ。」

ゾンビは彼に飛び掛る。

凰牙「変身。」

凰牙は仮面ライダーブレイクへと変身をする。

しかし、君達が前に見たときとは姿が違うだろう。

なんせ黒いマントと長い剣を装備しているのだから。

ブレイク「お前ら、潰す。」

ブレイクは剣を一振りする。

すると、ゾンビは灰になって消え去る。

しかし、ゾンビはまだ山のようにいる。

ブレイク「チツ……。今日に限って何なんだよ！」

いつもは十数ちよつとなのに、今回は見渡す限り全てゾンビだ。
今日は、寝られないかもな。

駿「なんなんだ？このゾンビたちは？」

スカル「知らないが、悪魔の仲間ではないな。」

駿「なら……。倒すまでだ。変身。」

駿は紋章の力で、仮面ライダーサタンに変身した。

真っ黒なボディに包まれたその姿は独特のオーラを放つ。
そして、サタンはゾンビに飛び掛る。

すると、面白いほどに潰されていく。
サタン「次々と潰れるや。」

ブレイク「はあ！」

俺は、剣でゾンビを切りかかる。

簡単に潰れるゾンビだが、この数なら巨大なモンスターと変わらないのだ。

ブレイク「ちくしょお！ブレイカー・バースト！」

俺は、衝撃波を放つ。

すると、ゾンビはぶっ飛ばされ、壁にぶち当たり、ある者はそれさえも突き抜ける。

サタン「なんだ？アイツ。」

ブレイク「誰だ？」

二人はお互いに駆け寄った。

サタン「お前、面白そうじゃねえか。」

ブレイク「そっちだってよ。」

サタン「なあ、俺と一緒にやらねえか？」

ブレイク「面白そうだな！」

二人は、ゾンビを蹴散らしていく。

すると、どんどんゾンビが消えていく。

その中に、ピンク色に輝く何かがいた。

ディケイド「この世界は誰の世界だ？」

アイツは……誰だ？

二人は疑問に思った。

ディケイド「俺は仮面ライダーディケイド、お前らを連れに来た。」

サタン「なんのために？」

ディケイド「世界はユニバースショックに破壊されようとしてい

る。ゾンビがこんなにいるのもそれが原因だ。世界の崩壊を止めるために協力してくれないか？」

そんな内容だった。

俺たちは闇の戦士だ。

しかし、悪ではない正義なのだ。

ブレイク「俺達は正義の闇だ。行かせてもらおう。」

サタン「俺もだ。」

ディケイド「じゃあ、行こうか！世界の崩壊を止めるために！」

3人は別世界へと消えていった。

迫り来るD／巡り合うH

ここは風都。

さわやかな風が吹くエコ都市である。

そんな風都の上空で一人のライダーが羽ばたいていた。

「仮面ライダー翼」である。

翼「どこまで来るんだよ！この鳥が！」

俺の後ろには、バード・ドーパントがいた。

バード「はああ！」

翼「チツ！もうどうなっても知らないからな！」

「翼・マキシマムドライブ」

翼「はあああああああああああつ！」

バード「グワアアアア！」

バード・ドーパントは落下していき、大爆発を起こした。

翼「チョロいもんさあ。」

翼「まだいやがるのか！」

地上で俺は戦っていた。

相手はスイーツ・ドーパント、マグマ・ドーパント、コックローチ・ドーパントだ。

翼「これでどうだ？」

「ELEMENT」

俺は、ELEMENTフォームに進化し、ドーパント達を一掃した。

翼「ま、こんなもんかな。」

ドゴオオオオオオオン！

突然そんな音がした。

あの音は、商店街のほうからだ。
行ってみることにしよう。

その頃、未来の世界で。

照井亮は存在していた。

亮「なあ、やっぱ俺仮面ライダーになったんだから嬉しいんだよなああ！」

飛鳥「そんなに嬉しかったの？」

俺は、幼馴染の飛鳥と仮面ライダーになったこの話をしていた。

亮「だってよ、俺の憧れだぜ！」

飛鳥「よかつたじゃない。」

亮「ありがと……うわあああああ！」

俺は、驚いた。

歩いていた地面に急に紫色の穴が開き、そこに向かって落ちていったからだ。

飛鳥「ちょ……亮！亮！」

俺は、変身を解いて走っていた。

そうそう、いい忘れてたな。

俺の名は赤沢ヒュウガ。

仮面ライダー翼に変身する大学生だ！

あの後、俺の相棒のスカイは抜け殻の翼メモリを俺に託し、自分の世界に戻っていった。

そんな俺は、帰宅しようと歩いていた。

そこには一人の少年が倒れていた。

俺は、それを起こそうとした。

ヒュウガ「ねえ、君大丈夫？ねえ、大丈夫？」

亮「んん……。」

その子は目を覚ましたようだ。

ヒュウガ「大丈夫・・・？」

亮「うん・・・ありがと。」

その子は、俺が嫌いなのかどうか知らないが、離れていった。

俺は、それをただ呆然と見つめていると、自分の後ろにいつがいた。

ヒュウガ「ドーパントか。」

そう、奴はナスカ・ドーパント。

なかなか強い奴だ。

どうして分かるかって？

ミュージアムのドライバーつけてて、赤色だからな。

ナスカ「翼、お前を瞬殺する。」

ヒュウガ「やってみろよ！変身！」

「翼」

俺は、仮面ライダー翼になった。

亮「あの人、仮面ライダーなのか？それなら・・・。」

「アクセル」

亮はアクセルに変身する。

アクセル「振り切るぜッ！」

翼「なんだ、アイツ。」

アクセル「はあ！せい！とりやあ！」

ナスカ「ぐ・・・ぐはああああああ！」

ナスカは一気に弱りはてる。

そして、

「アクセル マキシマムドライブ」

アクセル「決めるぜ！」

ナスカ・ドーパントはメモリブレイクされた。

翼「君、誰？」

アクセル「俺、照井亮！2代目のアクセルさ！」

変身解除したアクセルの姿は、あの少年だった。

俺も変身解除し、さっきの爆音の場所まで行くことにした。

その商店街での爆発跡はまるで落下した隕石のようだった。

それを俺たちが立っていると、そこに青年が話し掛けてきた。

その青年は黒いハットをかぶっており、どこかマヌケさも感じられる。

名を「左翔太郎」という。

翔太郎「今、世界が大変なんだ。ユニバースショックによって世界が滅ぼされようとしているんだ。一緒に来てくれるか？お前らの力が必要なんだ。」

ヒュウガ「もちろんだ！」

亮「俺も。」

俺たち三人は、世界の壁越えて、消えていった。

フィリップは・・・地球の本棚で興味あること検索中・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8544x/>

KAMEN RIDER GANBARIDE-CLIMAX HEROES-

2011年12月31日18時51分発行